

held it beholds, every hour, a picture which was never seen before, and which shall never be seen again.

三月九日

▲ ▲ 生

地中の虫も穴から出て来る時節になつた。私も二三日中に此地を引上げて東京へ歸らうと思ふ。國府津に於ける二ヶ月、それは豫想程の利益はなかつた。富士見屋では最良の室二間を、私のために明けてくれた、食物の上にも、待遇にも、特別の注意をしてくれた、それに何の不平はない。私の東京の家は、其建てられたる場處の關係から、冬でも至極暖かである、國府津の宿は、西北に何の遮るものがない爲め、風の吹く日は中々寒い、併しそれにも別に不足は言はぬ。只困るのは、其室の暗きことである、否、室は通常の明るさで、南も北も西も開いてゐる私の困るといふのは、畫をかくに適當の光線を得られなかつたといふことである、その結果として、國府津に於て製作した繪を、東京へ持つて歸つて見ると、殆ど別物のやうに異ふ、色が甚しく單調になり、輪廓が硬くなり、繪がわるく綺麗になる、そして黃の色が没して、綠は生々しく寒く見える、畫室を持たずしての室内製作は全然不可能の事のやうに思はれる。次は、天候の都合で、割合に戸外寫生の出來なかつた事である、もとより大作を試みんとの考はなかつたが、小品すらも僅かに十數枚を得たのみで、この位ひの繪はいつも四五日の旅行で出来るのである。こんな工合で、此度の轉地製作は失敗に終つたが、今のやうな煩雜な生活をしてゐたのでは、到底東京に居て實の

入つた製作は出來ぬ、何處でもよい、粗末でもよい、畫室だけ田舎へ持つて往つて、食物はパンに罐詰、夜は毛布一枚というやうな簡単な生活をして、氣儘に繪をかいて見たいものである。

十一日、午後から海邊でスケッチをしてゐたら、藤澤の〇〇君が來た。一しよに停車場の後の山へ上つて、雪の大山を寫した。日蔭のためでもあつたか、畫面が乾かなくて困る。〇〇氏はと見ると、眞トモに日光を受けた一本の杉を寫生して居る。杉一本、それを寫さんとした心持はよい、複雑な景色をさけて、單簡なものを選んだのはよいが、何の面白味もなき此木に、正面からの日光で、圓味も見えず、色も單調だ、正しく畫くには馬鹿にムヅカシイ、直ぐ傍に、五六本の杉の、斜に日を受けて、形も影も面白く、さしてムヅカシくないのがあるのに、それを取らぬのは、ヤハリ經驗が乏しい爲めであらう。經驗なき人は、ヤサシイ積りで、好んでムヅカシイ材題を畫いてゐるものだと思つた。

國府津もいよくオサラバにして、此夜の汽車で東京へ歸ることとした。(三月十一日夕)

△綿密は美にあらず。鑢紙の惡作を良く仕上げたる例なし。
△自然より誠實に描き上げたる畫は決して卑下すべからず。

ハント